

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370473

研究課題名(和文)ドイツ語における「状態変化」の表現形式 語彙と統語形式の相互関係

研究課題名(英文)Change-of-state expressions in German: lexical and syntactic forms

研究代表者

カン ミンギョン (Kang, Minkyong)

三重大学・人文学部・特任准教授

研究者番号：30510416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コーパス調査を用いて、ドイツ語の使役形式(状態変化動詞、lassen使役構文、使役の機能動詞結合zum ... bringen)のそれぞれの使用実態を調査し、形式間の相互関係を分析した。とりわけ、lassen構文とzum ... bringen構文に埋め込まれる動詞を調査し、両構文がどのような動詞の使役形式として用いられているか、使用頻度も含めた分析を行った。その結果、両構文は、それぞれに含まれる動詞のアスペクト的特性において使用上の相違が観察され、また同じ動詞を含む両構文については、結びつく名詞句(不定詞の意味上の主語)の種類において相違が観察された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the use of German causative forms (change-of-state verbs, lassen-constructions and zum ... bringen-constructions) through a corpus survey and further to analyze the relationship between the constructions. In particular, the semantic differences between the lassen-construction and the zum ... bringen-construction were examined by investigating the types of verbs that are embedded in each construction and their frequency in use. As a result, it was observed that the aspectual characteristics of the verbs embedded in the lassen-construction differed significantly from those of verbs embedded in the zum ... bringen-construction, i.e., perfective verbs occur in lassen-constructions with higher frequency and imperfective verbs occur more often in zum ... bringen-constructions. In addition, when combined with the same verb, the constructions display different patterns of object noun phrases.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：状態変化 使役構文 機能動詞結合 アスペクト コーパス コロケーション

1. 研究開始当初の背景

使役 (causative) は統語論と意味論の接点に関わる概念の一つとして、古くから動詞や構文を中心とする言語研究において重要な位置を占めている。認知言語学では、主語のプロトタイプは動作主 (agent)、目的語のプロトタイプは移動物 (mover) や被動作者 (patient) と想定され、「誰かの行為によってある物の位置や状態の変化が生じる」という動的事態は人間にとって最も基本的な場面の一つであるとされる (谷口 2004)。Goldberg (1995) も、「構文」は人間の経験において基本的な事態を表すものと仮定したうえで (場面記号化仮説 scene encoding hypothesis) 基本的な事態タイプとして「移動 (motion)」とともに「状態変化 (change of state)」を挙げている。このように、「状態変化」は現実世界の出来事を概念化するうえで重要な位置を占める。

状態変化表現には「ある状態に変化させる」ことを表す使役的表現と「ある状態に変化する」ことを表す非使役的表現が存在する。ドイツ語における「使役的状态変化」の表現形式には、少なくとも次の3つが挙げられる (矢印の後は対応する「非使役的状态変化」表現)。

- (a) Er **zerbricht** das Glas. (彼はグラスを割る) ← Das Glas zerbricht. (グラスが割れる)
- (b) Er **lässt** das Obst **verderben**. (彼は果物を腐らせる) ← Das Obst verdirbt. (果物が腐る)
- (c) Er **bringt** die Luftballons **zum Platzen**. (彼は風船を割る) ← Der Luftballon platzt. (風船が割れる)

「使役」の意味構造には、ある人またはモノへの働きかけ (CAUSE) とそれによる状態変化または行為 (BECOME / ACT) という2つの意味要素が含まれる。前者は上記3つの使役構文において共通する構造的意味であり、

後者は結果の具体的な内容を示す個別的意味であるが、この2つの意味要素が言語形式においてどのように示されるかが問題となる。すなわち、(a)の状態変化動詞のように、この2つの意味要素が一つの語彙に含まれている場合 (語彙的使役・統合的使役) もあれば、構造的意味と個別的意味が別々な語によって示される場合 (統語的使役・分析的使役) もある。また統語的・分析的使役には、(b)のような lassen 使役構文の他に、(c)のような bringen 機能動詞結合もある。状態変化動詞の中には、(a)の動詞のように、使役的用法と非使役的用法を併せ持ち、使役起動交替 (kausativ-inchoative Alternation) を示すものが多いが、(b)や(c)の動詞のように、非使役的用法のみの動詞も多く、このような動詞の場合 lassen 構文や zum ... bringen 構文などを用いて使役表現を形成する。

意味的な観点からは、(a)の状態変化動詞が「直接使役 (direct causation)」を表すのに対し、(b)の lassen 構文は「間接使役 (indirect causation)」を表し、本動詞の意味特性や被使役主の意思の有無および文脈によって様々な意味で解釈される。一方(c)は、形式的には(b)同様「統語的使役」でありながら、意味的には(a)の「直接使役」に近いと言える。すなわち lassen 構文と zum ... bringen 機能動詞結合は、意味的に区別されると考えられるが、これまでの研究において別々に扱われることが多く、使役を表す構文形式としてその相互関係が十分に捉えられているとは言えない。しかし使役表現の全体像を捉えるためには、個々の構文の使用実態を大量のデータに基づいて分析するとともに、構文間の相互関係を明らかにすることが必要である。以上が研究開始当初の問題意識である。

2. 研究の目的

以上のような問題意識に基づき、本研究では、次の3点を目的に取り組んだ。

(1) 状態変化動詞、lassen 使役構文、使役の機能動詞結合 zum ... bringen について、語結合および使用頻度も含めて、実際の使用実態を分析する。

(2) とりわけ非使役的用法のみの状態変化動詞（使役的用法を持たない状態変化動詞）の使役表現として機能する lassen 使役構文と機能動詞結合 zum ... bringen が、それぞれどのような状態変化（すなわち、どのような動詞）の使役表現として用いられるかを分析し、両者の使い分けを明らかにする。

(3) 上記の分析結果に基づき、使役形式間の相互関係 語彙と統語形式、lassen 構文と zum ... bringen 機能動詞結合の相互関係を明らかにし、状態変化を表す表現形式（使役 vs. 非使役）の全体像を捉える。

なお本研究は、言語の形式と意味の関係

すなわち、ある言語形式がどのような意味を表すか、または、ある意味がどのような言語形式で表されるか に関する研究の一部として位置づけられる。

3. 研究の方法

上記の研究目的を念頭に、次のような方法で研究を進めた。

(1) 本研究の方法論的特徴は、まずコーパスを用いた大量のデータ分析を通して、実際の言語使用に基づいた構文分析を行うこと、また複数の構文形式を同じ枠組みで分析することによって、ある事柄を表す表現形式間の相互関係（語彙と構文の関係も含む）を捉えることにある。

(2) 本研究では、構文に現れる具体的な動詞や名詞句を抽出し、その語結合および使用頻度の分析を行う。そのため、大量のデータを用いた語結合分析を効率良く行えるよう、データ収集はドイツ語の語順的特徴などを考慮し、十分な検討のうえで行った。具体的にはキーワードである動詞 lassen や bringen が後置されるデータを収集することによって、

コンコーダンサー機能を使って、比較的簡単にキーワードの左側に現れる動詞や名詞を抽出することができる。

(3) データ分析の対象は lassen 構文と zum ... bringen 構文を中心にした。具体的な調査方法としては、まず、ドイツ語研究所 (IDS: Institut für deutsche Sprache) の書き言葉コーパスを用いて、各構文のデータを収集した。次に、それぞれの構文に含まれる動詞（本動詞または基底動詞）を抽出し、各構文がどのような動詞の使役表現として用いられているかを調査・分析した。その際、非使役的用法のみの状態変化動詞を含むものに限定し、語彙的使役動詞の欠如を補う使役表現としての両構文を分析対象とした。

(4) (3)で抽出した動詞については、まず、lassen 構文にのみ現れるもの、zum ... bringen 構文にのみ現れるもの、両構文に現れるもの、の3つのグループに分類した。次に、と については、両者の動詞タイプの意味的相違を探った。また の両構文に見られる動詞については、結びつく名詞句の種類およびその出現頻度も含めて分析を行った。

(5) なお、本研究のコーパス分析では使用頻度（出現頻度）が大きな意味を持つ。すなわち構文分析における動詞や結合名詞は、当該表現が容認可能であるか否かという観点ではなく、実際に使用されているか否か、どの程度使用されているかという点を重視している。

4. 研究成果

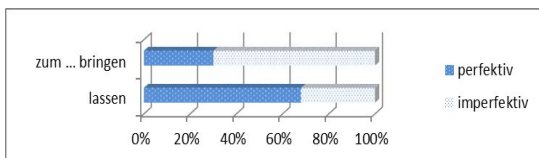
本研究の主な成果は、次のようにまとめることができる。

(1) lassen 構文と zum ... bringen 構文の使用と構文に現れる動詞タイプの間には一定の傾向が認められる。

まず、動作主性動詞（人主語を取る自動詞）を含む場合について述べる。その中でも意志動詞を含む場合は、「要求」や「許可」を表

ず lassen 構文と「惹起」を表す zum ... bringen 構文というように両者が意味的に区別され、使用頻度の観点からみると、前者で多く（または前者でのみ）用いられるもの（arbeiten, warten など）と後者で多く用いられるもの（singen, tanzen など）がある。一方、無意志動詞（身体的・心理的变化動詞：staunen, zittern など）を含む場合は、（動詞の意味からして「間接使役」が成立しにくい）lassen 構文と zum ... bringen 構文がほぼ同じ意味で用いられる。動詞によってそれぞれの構文の出現頻度は異なるが、それは個別的・慣習的なものと考えられる。

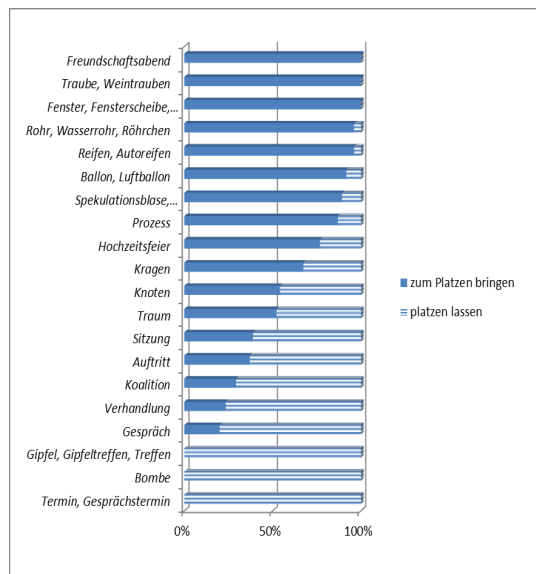
次に、非動作主性動詞（物主語を取る自動詞）を含む場合については、動詞のアスペクト的特性が lassen 構文と zum ... bringen 構文の実際の使用頻度に大きく関わっている。すなわち、完了相（perfektiv）の動詞は lassen 構文に用いられることが多く、未完了相（imperfektiv）の動詞は zum ... bringen 構文に用いられることが多いことがコーパス調査において観察された。



動詞 lassen が本来「～のままにしておく」という「放置」の意味を表し、bringen が「～に持っていく」という「使役的移動」の意味を表すことを考えると、lassen 構文には結果を含意する完了相の動詞が用いられやすく、zum ... bringen 構文には結果を含意しない未完了相の動詞が用いられやすいという結果は自然なことかもしれない。

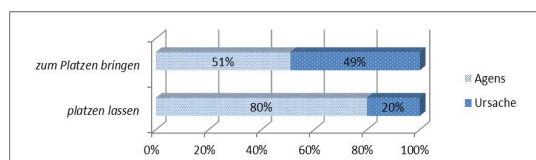
(2) もちろん lassen 構文と zum ... bringen 構文の両方に用いられる動詞もある。このように、ある動詞の使役表現として複数の形式が用いられる場合については、結合名詞の種類やその出現頻度において傾向の相違が観察されている。

以下では、非使役的用法のみの動詞 platzen とその使役形式 platzen lassen および zum Platzen bringen を例にデータの分析結果を示す。次のグラフから、結合名詞（使役構文の目的語 = platzen の意味的主語）によって platzen lassen が多く用いられる場合と zum Platzen bringen が多く用いられる場合があることがわかる。



これには、動詞 platzen の意味用法（多義）の問題も関連しており、意味用法に応じてそれぞれ異なる使役形式が用いられている可能性がある。また、ある特定の目的語を取る platzen lassen と zum Platzen bringen が厳密に言えば意味的に区別され、どちらの意味でもより多く使用されるかが出現頻度の違いとして現れている可能性もあるが、いずれにせよ、結合名詞が多義や構文の選択に関与していると言うことができる。

また、使役構文の主語に現れる名詞についても有生性の観点から分析した。次は、上記同様、platzen lassen と zum Platzen bringen のデータであるが、lassen 構文より bringen 構文において無生物主語の割合が高いことがわかる。



lassen 構文と zum ... bringen 構文における無生物主語構文の出現頻度については、もちろん構文に含まれる動詞ごとに結果が大きく異なり、個別分析の積み重ねが必要である。これまでの調査で観察された大まかな傾向としては、zum ... bringen 構文の使用頻度が高い場合、無生物主語構文の頻度も比較的高く見られる。また、結果性の強い完了相の動詞を含む使役構文において無生物主語が比較的多く観察される。

(3) 最後に、本研究の方法論的意義と課題について触れておく。本研究では、大量のコーパスデータを用いて、構文に現れる具体的な動詞や名詞も含めて分析することによって、使役を表す諸形式の使用実態および形式間の相互関係(使い分け)を捉えることを試みた。理論的研究において等閑視されがちな具体的なコロケーションを使用頻度の観点から分析することで、実際の使用実態における「傾向」としての、諸構文形式の意味的相違を捉えることができ、それは構文分析の方法論の一つとして有効と言えよう。しかし、コーパスにおける「出現頻度」の解釈については再考の余地があると考える。「コーパスに多く見られる・見られない」という「出現頻度」には、言語内の問題だけでなく、「表現対象になりやすい・なりにくい」という側面もある。この点に関しては、実用的観点なども含めて、コーパスを用いた言語研究の課題の一つとして、今後も引き続き考えていきたい。

〔参考文献〕

- Goldberg, Adele (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 谷口一美(2004):「行為連鎖と構文」中村芳久(編)『認知文法論』(第2章)東京:大修館書店。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

カン・ミンギョン:「使役構文における項の有生性と不定詞の意味特性」, 2016年5月、清野智昭(編)『ドイツ語における有生性』日本独文学会研究叢書116、37-52。(査読無)

Susumu Zaima, Minkyong Kang: "Zur gebrauchts- und korpusbasierten Analyse der Konstituentenverbindungen im Deutschen" 2015年3月, Domínguez Vázquez, María José/ Eichinger, Ludwig M. (Hrsg.) *Valenz im Fokus: Grammatische und lexikographische Studien zu Ehren von Jacqueline Kubczak*. 245-260. Institut für deutsche Sprache (査読有)

カン・ミンギョン:「語結合分析と頻度—zum Platzen bringen と platzen lassen を例に—」, 2014年5月、恒川元行・大園正彦(編)『コーパス利用に基づくドイツ語研究—幅広いデータ収集と頻度から見直す—』日本独文学会研究叢書098、37-48。(査読無)

〔学会発表〕(計3件)

カン・ミンギョン:「無生物主語の使役構文について」, 2015年5月31日、日本独文学会春季研究発表会・シンポジウム「ドイツ語における有生性」, 武蔵大学(東京都練馬区)。

Minkyong Kang: "Form-meaning relationship and frequency of use". 2013年9月9日、跡見学園女子大学科研費プロジェクト主催「Stefan Müller 教授ワークショップ・講演会」, 跡見学園女子大学(東京都文京区)。

カン・ミンギョン:「語結合分析と頻度」, 2013年5月25日、日本独文学会春季研究発表会・シンポジウム「コーパス利用に基づくドイツ語研究—幅広いデータ収

集と頻度から見直す―』、東京外国語大学
(東京都府中市)。

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

カン・ミンギョン (KANG, Minkyong)

三重大学・人文学部・特任准教授

研究者番号 : 30510416